



志保之里

初
十
石
布

5
508
25



508
25



後漢、槐桓不肯仕、鄉人勉之曰、千祿求進、以行志也。方
今後宮千數、其可損乎。厩馬万匹、其可減乎。左右權
豪、其可去乎。慨然嘆曰、使桓生行而死、還於諸子、何
有哉。朱子語類
百三十五

嗚呼、道之んては、くはるの漢の内柄、れは、
況や、季世とや、陳仲弓が、大守の誘と、命り、臣者の
葬と、送、りて、さか、が、か、識過す、り、り、と、得、る、ら、が、如、
あ、し、り、と、豈、一、朝、も、官、の、形、を、も、ん、や、君、の、の、は、
回、り、れ、ん

○内学 漢書識緯風角 外學 六經義理

○漢儒注書只注難曉處不全注其本文其辭甚簡

○漢儒注書只注難曉處不全注其本文其辭甚簡

類語 古人の注解甚簡後人の注解甚難時風如是

欲多れ後世と云ふは流遠くして其代の文字

と禽得たれ事甚難一以此註解家々に整く

書亦多くしり讀者多岐はゆひて古人の意を

知ふれり多し況や桐葉論を以て自家に博

と術ぬ類をやくとらやゆくとらやまじし

○或人因縁の字義共よふれと讀其分意如何と云

因は由也縁は禰也一はくも一はくも讀くも意言一

やなと一草本の種子のよれ是根枝花葉の由来に

一其まよふまにを具こころも水土に因循せられ

其芽まよふも不能ふも其まよふの由は因りて

縁一以て由と云れぬ

○目、筋の本字 筋ハ俗字也 声ハ音慶 本声の字也今聲の畧

如 音石女無子者曰如俗誤

如 如忌の如に如と用ゆ

如 如れ類多し

望し彼之障の雲之霞のぼるる化し作りし物たる

久げく日影のあやむし此障をらに障れすまうとやとす

○凡そ曆家春秋の彼岸を記すもの久しき春分秋分

の目と中日の行りやにやの安倍家の曆本に及し

通せし春秋二分より三日やと其初より六日やと中日や

定めたりやと行りやす互に彼岸に入れ日天没日あり

一日と定て次の日と入るも故實なりや古の曆と異なるに
如右なり

貞享曆も没日と月ひず故より二分一日と隔て彼岸

の初なり

又彼岸の中日と日輪正西に没と故に淨業日想觀

の時より曆家説に曰日の正中より春分春分

れ前三日秋分秋分の後三日正しく日赤道とあり

よりこれより二分の時正れ第一して其日にしりす

日の西に入れを正ると云

○天竺の曆ハ一歳と云まより熟時自正月
至四月茂時自五月
至八月

寒時自九月
至十二月ふれを正ふ九月ハ印土印度三季の初月なり

阿蘭陀等の曆ハ二十四時より一時と六十刻と定め西の

けと一日の初とに日月を置りたりして寒暑のふれ

林寺招賢士，修西方淨業。其地多白蓮華，且彌陀佛國，以蓮華分九品，接新往。故大師稱其院曰蓮社。或云，寓此社者，不為名和於泥。所上法，喻如蓮花清淨，故名之。又大師門人法要巧刻木為十葉蓮花，植此池中。用機關，凡折一葉，是一時與刻漏無差，俾禮念不失。正時故為社蓮。

社結絲聚會處，假之為名。
唐詩：大道本末，在斯。白雲那得有，何期遠。公他到蓮花，漏箭向中。禮六時。
白木淨宗蓮社號傳

釋白蓮社。京北人，未詳其姓族。德宇宏，智鋒爽，邈然不嗜世味，唯好頭密妙旨。既洞晚，投鎮西聖光師，修淨業久矣。天福元歲，三月從國使橋尚書入宋。理宗紀定六年登廬山，謁睿禪師，傳衣鉢，而飯朝。自號白蓮社，淨宗社，號權輿。于此旦，師乃廬山義祖也。先師門人，又有教蓮社等。蓋此時社號問左歟。勅額杖桑廬山大阿彌陀經寺，開

山第一祖賜系特号旭蓮社大乘
澄圖大菩薩智演回師大和尚泉
列大鳥那產也姓源大典廐義氏
之裔泉朝史義貞男母百濟氏噉
無嗣待列家原文殊大士一夕聞
兒啼疾籬便問戶舉以為子五歲
親文墨暗誦曼珠神咒問里嘆異
焉師梵相奇偉性恬而器閑九歲
入東大寺師曰雅公而糴漆授具
長惠解天然才氣秀逸研窮俱舍
唯識闡真洞徹三論花嚴妙旨既
而至禎尾山精練兩部秘教且善
悉曇字義然傳台宗於兼遍觀豪
二師每友東福虎關公親敲禪要
且久學淨教淨九品西山二流又
遙游東關謁錄倉光明常卷大和
尚循其將訓稟鎮西正系自尔名
望新而盛弘通淨宗勸以称名一

行花園帝文保元年丁巳泛滇津經

入元仁宗延祐四年登廬峰見東林優曇普

度大師學輪下而面授無邊海藏

口決傳佛圖惠遠之正脉刺蒙教

外證許在元九五季巡歷名蘭勝

區得諸師印可於此齋携三藏佛圖

將來佛舍利遠公傳持六時禮蓮

花炉及衣盜文籍若干啟朝宴後

醍醐院元亨改元辛酉也後明極帝召

教聞法內外謂佛家鸞鳳僧中龍

虎帝崇其道德正中甲子元年特詔

創梵宮勅号旭蓮社以精舍呼蓮社普赦

天下念修般舟三昧益博綜英發

後村上院真回四年壬午北主康永天變

地大疫疾此屋愁苦天輪惱宸襟

便命演公裋災師應命昇九禁奉

授一乘円戒使王公以下士庶七

日唱一百萬遍念佛應時妖氣忽

退消四民年，萬歲帝感激之餘，特
賜大乘澄月菩薩宗，號被紫袍，且
敕宣哀翰寺，額號扶桑廬山大阿
彌陀經寺，其封書曰：法師遠涉滄
波，覆果聞於絕域，遐遊唐縣，研妙
機於碩師，道施食封，百戶，恩榮
之盛，亦如斯。師名翼，四布振跡天
威，風至漲吉水，法流北廬山，傳燈
淨宗，中與誰去於師之右，半我回

禪淨兼學，道場以旭蓮社為先。屬洛

山後龜山院，文中元年。北主應分秋七

月二十七日，師召大眾而上堂，遺

誠普說不異，平日端坐合爪而辭。

眾向自影唱佛名，悠然而坐化，報

壽九十有餘歲，嘗述十勝論，驚覺

論柳子伏象論，松風論等若干帙。

藏室，畫令皆行世。

大樹家，蓮社號。

東照宮

母國院

德蓮社

台德院

光蓮社

文昭院

順蓮社

有章院

照蓮社

貴介蓮社

瑞龍院

天蓮社

龍雲院

雄蓮社

尾張族
光友卿

高松侯
整堂

○我先君細誠卿所自の法諱と定まりしに院号の

上に御宿位とありたり

行は名兼中守の智徳大
授たりし

從三位前黃門泰心院

院の字の下殿の字
と降せたり

是ハ宿位ハ朝家の編令院号ハ傍家の号なり

少書とありしに但し中世ハ本貴族院号の下

必宿位と書し牌子の通式にや

某寺殿及び某院殿と書ありし一塔頭と云し人等

某院に位牌と安置す故本願の号と云しては名を

其下に記したるは將軍の位牌のこゝま

等持院殿贈一品大相國仁山妙義大禪定門或仁山義云
 等持院ハ山城國葛野郡衣笠山の麓に建キヌカケらる
 録倉之ハ基氏基氏の爲に香火の場と建タテて長壽寺
 と額カガクせり及にけ寺にてハ尊氏の位牌に長壽寺殿と
 書キやり其殿の字ハ法興院殿法成寺殿等在世イニに
 祚イハレにして薨後ハ稱イハレく喚イハレく一時ハ俗風也京都
 將軍家前豫舍將軍家の時北条氏寫寺院と立タテて
 卒後牌子に某寺殿と書キしり世の凡俗とるり
 凡そ貴介のは名ハ必官位の上ハ院号と書キりし
 近世に及でハ平侍ヒラサマと下シり俗家とるりして大聖院号と
 書キり日蓮宗妙ミチノの商人農氏ノリノと下シり金と書キせハ院号と
 題イテす是コトに至てハ川原者カハハラノにハ院号と授け侍りハ京家
 たりし之ハ侍り彼カハ今イマの郡類也何ナニと士家シノひり
 下シり日蓮宗がれカハにカるり鳴呼ナカヒ
 古例院号の上ハ官位と書キハ号ナメりやシハ人ヒト有り
 今ハ日蓮宗イニ泉谷イハりハ慈恩院の牌子イハの中ナカに
 贈正二位大休寺殿古山源公
 足利直義郷アシノカミ錦小路殿ニシノミチノのイハ名也先ハ獨院号
從三位下

の上の位位と置となひにありし

法名に戒名あり道号ありふれど世に貴人として

よみ只二字の法名のみ別に道号と書ゆらむり

御堂園白道長公の法名と行覚と号して支田満仲の

戒名と満慶と号して教也

之後在家別業して房号法名とつて事ありしゆ

熊谷入道と法力房道生等号して教也此法房道生は師と号す

鎌倉將軍家の時宋の禪僧多為納してより道号

と稱りしをせしきこへりしは二字の法名のよりし

二位元平政法名と如實妙觀大禪定庄と号して類也

仍し北条泰時の位牌鎌倉常樂寺に在りこれに

過を觀阿禪門 過を法名にけりし後世にまじり
ゆえ鎌倉寺の如し

より又經時の牌子鎌倉光明寺にありこれに

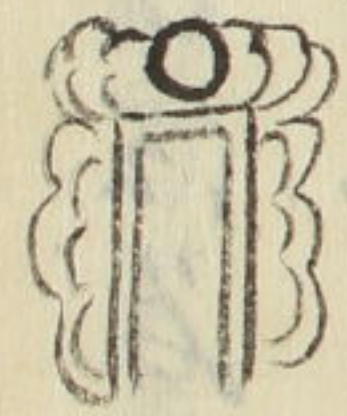
と書ししより道号なり禪宗の寺なり後わ

其号に

蓮華寺殿安樂大禪定門

かく題せり 鎌倉宗廟に只二字の法名あり今の寺に
門徒の法名の如し

右の位牌は入りし雲日首也



禪宗盛に興てより大人官家の法名に居士号は
書りて今法字にけり致して居士と稱して榮くす梅
子に中阿含經に神利持士居士工師と云々
長阿含經に刹利婆羅門居士首陀と以四姓と云り
居士と云 譬喻經に所謂昆舍と云りて高賈市人
の稱呼也又長阿含と梅すりに官主居士多積財宝
名爲居士と云り善門品神註にも居士と多財居士
と云り但し又之居士山居財之士多云々中居士
道士と云るとめて官人に充ゆる者居士は官の稱
呼にわらずりて道家の神品にあり稱也これ
庶人にて道と修行する者と居士と呼ぶ可也今公卿
大夫号とめて居士と稱するはこれと稱せり何の
宗ありん

。我國に古延臣ありて死すれば諡辭と賜ひて号とす
諡ハ藤原不比等以母也東之條孫改弟家入道とて如實
と法諱ありしりて之を新法名と授けしなり

南朝に時々々諡号の典あり

。我國に姓につくさるる朝臣庶民ありこれとめて姓の字卑

朝臣庶民の類也

とるなりされば官人衆うれはんと早うさしやまらり
續日本記 等と見てよる

忍海爾足祿爾磨と殿して連の姓と賜りし類也

○宣令に 天皇我詔旨 良方 止 とあるとススラガニコトヲテ

讀半或職士の傳也勅旨のニ字とコトヲと訓アリ

草芥和言 集名 詔旨 浪ガ 止 ハ コトノリ。アラマシと云轉語にコト

ト。ラニと讀り凡そ有職家の名目其讀方と傳後

萃して私にいらる時ハ必訛謬多して智士の筆を

らるる也

○儒典ハ菅江清中等の家長より讀みあり訓点あり

佛書ハ山門寺門南都等各自其讀方わして相混ぜず

近世ハ雅意に任せて私讀し其理に違ふものあり

予ハ備忘の爲に私に 私書編 たり

○瑞雲山の釈迦堂 瑞雲の瑞像 御身掛之 絶 春 甲

雪峰和尚每 真 行なれ侍りて 白布 たり

まの也 拜礼 堂の裡に あり

春風吹花拂拭赤檀聖王儀

曉林残月 觀瞻紫金靈光

二十年の暮りの春も花を咲かして教のつる木の
枝に結びかへり

ゆきをうきまじりて

清涼寺の身ミ披ヒをウ安ヤ門カ院ノ

持明院チメイノ中ナカ納ノケてテ家ケ基キ郷ノのノ女メ名ナ忍ニ死シしテ流リしクとモちシみニ釈シ迦ダ

陳子三月十九日逝す

世尊の身像に待り流しうらに佛告にうら世尊に

法令也

。能野ノすスそソ作シ人ノのノ字シ平ヘ中ノとト贈ルりシがガ包ツ紙シ

書信は

。東ト川ノ流ル流ルとトきキよヨにニ流ルるルをヲ向シてテきキよヨ

。葉ハ葉ハのノ曼マン荼タ羅ラ講コウ寺ジ

村之也云希能保村にあり有司の簿に門の事と作らる

本ホ村ムラ所ト也ナリ

のノ下カ流ル西シ山ノ種シユ林ノ名ナ也ナリ宿シユク壽ノのノ遠トらニ流ルるル也ナリ

流ルるルとトきキよヨにニ流ルるルとトきキよヨにニ流ルるル

西シ堂ノのノ春ハルのノ花ハナをヲ咲カかシてテ流ルるルとトきキよヨにニ流ルるル

りリてテ流ルるルのノ末ノ日ノ彼カ宝ホウ利リはハまマにニ流ルるルとトきキよヨにニ流ルるル

おオゆユりリしシ川カハ流ルるルとトきキよヨにニ流ルるルとトきキよヨにニ流ルるル

のかりて曉鐘遠く傳ふ生田川の名は張波の足不
とひ〜〜〜
東嶺の〜〜〜
ふも又〜〜〜
生田の社〜〜〜
久し久し五年の春卯任記と云ふて後之屋〜〜〜
少なり〜〜〜
東西五年餘り
南北十年餘り
伊豫守信安〜〜〜
して〜〜〜
賜相國と名和れ〜〜〜
ゆじ〜〜〜
草ぬ〜〜〜
之春〜〜〜
傳〜〜〜
蕭々〜〜〜
當時〜〜〜
は〜〜〜

のかりて曉鐘遠く傳ふ生田川の名は張波の足不
とひ〜〜〜
東嶺の〜〜〜
ふも又〜〜〜
生田の社〜〜〜
久し久し五年の春卯任記と云ふて後之屋〜〜〜
少なり〜〜〜
東西五年餘り
南北十年餘り
伊豫守信安〜〜〜
して〜〜〜
賜相國と名和れ〜〜〜
ゆじ〜〜〜
草ぬ〜〜〜
之春〜〜〜
傳〜〜〜
蕭々〜〜〜
當時〜〜〜
は〜〜〜

のかりて曉鐘遠く傳ふ生田川の名は張波の足不
とひ〜〜〜
東嶺の〜〜〜
ふも又〜〜〜
生田の社〜〜〜
久し久し五年の春卯任記と云ふて後之屋〜〜〜
少なり〜〜〜
東西五年餘り
南北十年餘り
伊豫守信安〜〜〜
して〜〜〜
賜相國と名和れ〜〜〜
ゆじ〜〜〜
草ぬ〜〜〜
之春〜〜〜
傳〜〜〜
蕭々〜〜〜
當時〜〜〜
は〜〜〜

儀に尊わげやんにとぞもれむをば

弘法尊の佛と宇河弥所造夾侍の哀室一人の時たに作

まゝにせらるしき

あつしき香を拾げて五年に孝に悲心交流り

緋殿風回静 玉灯相絶 薰一偈 弥陀佛

他奈事之云

三祖

善導 智恵 東山 師 善恵 回師

の真と相し 當山才一祖天真乘

運上人の像に謁す師ハ華山院内久藤師継之の令子

西山の正脈と傳へ名望一世に高りし 當寺と基して

圓福寺と稱せらる 後醍醐天皇特に紫袍と賜ひて恩

栄多のくに輝きゆりしとや 光明院の康永二年有

十七日に示寂せりしとて世空光久人の時寛正後醍醐院 二年

六月廿二日靈異ありて 觀經の裏相と感得せりしと云

日輪山曇華羅宇と改号りし或云圓福 後奈良院

天文十年二月大五日初願の繪合とト一官に列し

後の凡そい善峯の風よく檀林の花堂にして

扇友の字徒武と稱すとて曼荼羅堂に并りゆりし

ふ沈ま非出世の傍居りしとて所懐をかげし

迎く也 其のすまの丹青を汚くして 徳徳を用ひ 輪
圓月朗けして 白顔と照らす 又類々の 聖圖に白ひ
きり 因縁をく 八百千の 大海に善持の 恩恵と
流し 六十万億の 金山時に 能觀の 畫堂に座し
たり 又慈悲の 尊容中 言は 畫にいけり 念り
し 一々の びんごり とおし せし くれり 言たり
る 況して 礼し 音同と 絶やし けり 漸く 希は 希
ふ ありし こと 宝庫の 聖像 各各 以下 以下
し こと 色室に 押床と して 買て 見し こと 西
三聖の 大像 登容と 顔輝の せり 當山寺の 什室也
梅下り 當國部 田祐福 講寺の 三聖と 小尊と 称
す 曼荼羅 寺の 大尊に 對し する こと
其他 思教 牧溪の 畫圖 也 大師 惠心 僧都の 真筆 也
殿司の 涅槃 像も 希有の 聖像 といふ べし 也
小遣り 又 高祖 東漸 大師 鏡の 印影 といふ
自登自 又 圓合 の中 遣り 也
文殊 大士の 鎮守 八幡の 瑞箭 あり 出現
畫像 といふ こと 也 といふ こと 也 といふ こと 也

救世の善巧いづつたなりし永さりと今も奉らう
あつてまのたつらやうに見ゆ小なる佛国をいふまは
通るやと苗代らうとて民の家ぬくまうたりや
俸禄の資と保て耕稼の君りしと知す白氏れ
上に肆はして言役の勤わうととまされかうと
世に慮し路と経ゆしや情老て思れ邪らうと
惶九心解て智暗しんと都に誰をせん派と括うらんや
我己心流水に随て去残軀白雪と興に因りては足れ
塵をく絶るししやう垣の短きをいふに
か、待得侍るにた知ししに何事とて朝しての
思とらんし

睡蝶夢 遑轉別春 遠山長水 悠行人

落花眼 庭風光晚 新見孤螢 點綠莖

龍淵上人らま 東より生きて卯月の初夜庵と閑る
けり 喘るるやうにふあうて徳園やうなるやあ
桂と包て切はほてあうたりし

あふれまは法にやあひのあつちあひとせんていし

六月より青量品の説法といふて回向作りたる
詩歌各一首と詠じて志と兼く作る。

鷲峯雲尽テ耀金輪ヲ遠本新識カ五百塵

無滅無生亦無跡清風特地自天真

ほや船に心なきとて建ちたりとて千智の結の月

つゝ波危威鷹の目られどそ人候名の志作りしなり

経とと痛スけりしにやと多お集りしとて或日は神足

のや神にゆきの移せとて誰にらびびなりとて

わいしはのうたれぬまもふとてとておのれを

わいし

たにから今もぬとてまのちとてとて人

まのちとてとては磨滅は清いもとてとてとて

鳴呼とて漸ラじ花音と弾射と水に指カく遊堂と

経言とて類はれ情ちとてとてとてとてとてとて

のそととぬれ群獅と海とて魁送れとてとて

片物多と活とと指とととととととととととと

とてとととととととととととととととととと

蘇リの手とととととととととととととととととと

俗云、（？）の靈怪と、梅千りに維摩經に辟言如人畏時
此人得其使之、足らる人半物に恐畏す。時情と
小怯弱なり故に鬼主使と得てこれと懼す。

○甲午の春常列ノ浦（？）の民邪にあて立（？）連真心派

とや之半なりて多る擲れ御不繫（？）又駿河守

の村（？）少してこゝ有相流とて客に邪我とて

足又日連 吏（？）これとて東都にわたりて邪信の

はるる（？）足多日連義と表

契（？）邪法と法んとてとてとて

黨の邪法惑惑とて二二とて我日本の外なる天下の國

賊とて日従りたり

○天竺師知識と唱へて極業教の鳴鐘と鑄り

甲午五月朔日より勸回ニ音鑄鐘六月三日供奉

正覺寺の丈人（？）に銘と法とに而をもとて

有棧而應 依感而通 干出干歎 同證圓通

とてはるる（？）又もるる（？）

わききへはるる（？）

林顔孤月拂炯波 一片放心別恨多

自れいそ欲を満るしと倭國東一人と終つて能
やしと所一人の恨せのりしとほかに我を長
家属縁をくそ徳にかりと云るなり
海井まゝなり
日殺す 嗚呼
夢のむせは身のむせのむせなりとも
いそりくのむせをなれと云れて人殺のむせ
いそんそ、生思ふむせのむせ

○牛車金浪改鑄のり天下に 金浪を流す

金銀とに度長の上品なりしと云ふ今の金浪信

と云てしと云ふ恨いそ多かり

○蘇我福園里の家信長 火にたてられし家督のりしと云
けり無むるはの故とも昔北条の主は信仲和士用と
毫也し士用は倭奸の内臣にして論説百端にして順從
化に異なりしと云ふ毫受りしに陰に毎に江右に
侍り言辭容止法の鄙無と極只燕安夜と云て晝に
継近習も復君臣の礼をくす外巧言令色と云ふし
ひそくに賞賜を食りけりし齊主意と極て榮隆
官爵財用等の回半の外臣に分奪し三月に及
朝を視しと云ふ外専ら声々と敬ひて奸佞に現は

三年為客自堪憐 強對蒿華淚潛然
官舍蕭々愁卧裡 不聞鄉信却聞鶻
とまづしをいづれも返船をすりて

客情入筆笈回憐 武野懷歎眼悄然
孤枕夢飛千里月 曉窓空聞一声鶻

。近世茶室園とて香うてうたをとりていそよふ
とまづりうらうら子人いれしをりうらうらと
たれの花容はくろく 花経力の道生八歳等た
定る貞珠蘭一名魚子蘭とてふとふれ也

。仙人傳 酉陽雜俎 十九を梅とていふんげのれ介ふたのん
くうの四回く 所史のつとふたふちやうりうらうらとや

。荷包牡丹 一名笑兒牡丹 けん草

長寿花 花後と梅とていふんげのれ介ふたのん
これ全盛のつとふたふちやうりうらうらとや

秋牡丹 道生八歳と梅とていふんげのれ介ふたのん
くうの四回く 所史のつとふたふちやうりうらうらとや

仁人常 花後と梅とていふんげのれ介ふたのん
これ全盛のつとふたふちやうりうらうらとや

總木 敗子樹 敗のやうりうら 拾 棒 杖のふらうり

檨 檀 檨のふらうり 檀 杖のふらうり 山茶科

虎耳草 淡竹草 虎のふらうり 淡竹のふらうり

前 名 故 吾 三 と なる

法衣の値は高しわろ糶とこら飯とかくしは夜四
葉と犯して刑を願ふはぬりさひくに餅物の俵は
湯と故ふかしの餅に掛たつたれをいと喜子に呈と歩
思つてるは伴竊とある一懐のくら夢に夢ととる
給の利と出ひ空しく水とれ月と掃して東洋と西林
つうに肥啼女哭とうす狂花憐れんの和なるまを
ふれ打ちやけりやうりまうりまうりまうりまうり
しそわいゆしる夜にかけるをこもい草の巻わ
こまうりてあやの白綿と女のせうぬとえらな依
故のほろろさこほとい初と所頼の心更にぬる粘着
病骨と纏ひて薄と抄にいとん日何半とう狂し
しそわいゆしる夜にかけるをこもい草の巻わ
病のまのまもかこもわらん華子并合りてはた
こもまも也とほ舟の風流流々として一序の秋光
た更際漏網に月影所願て万頼供に寂寥たること
のよにたよほ世のすまも情見たの定らるるら
としそわいゆしる夜にかけるをこもい草の巻わ
葉とらうりてあやの白綿と女のせうぬとえらな依

乃らんと今一入は是れを居てらる。抱ゆりて
いふれ海をくるとくると 石とみちじゆとて
をくればやまのあり

乃らんと今一入は是れを居てらる。抱ゆりて
アサナラ 乃らんと今一入は是れを居てらる。抱ゆりて

乃らんと今一入は是れを居てらる。抱ゆりて
乃らんと今一入は是れを居てらる。抱ゆりて
乃らんと今一入は是れを居てらる。抱ゆりて
乃らんと今一入は是れを居てらる。抱ゆりて



117

